春のふるさと交流会

観桜会と安塚区訪問

上越市　滝沢一成

ふるさとを旅人として探訪する。それは不思議で、どこか甘やかな体験である。

平成二十一年四月九日と翌十日。ふるさと交流会（平成二十一年春の観桜会）が行われた。総勢二十名に満たない参加人数であったが、終始和やかな交流会であった。私自身は、実は一昨年より上越の住人であり、どちらかといえば訪れた皆さんのアテンダント役であったのだが、旅人である皆さんの視点で交流会の思い出を綴ってみようと思う。

九日。春爛漫とはまさしくこういう日のことを指すのだというくらい、まぶしい陽光満ち、爽やかな風吹き渡り、そしてなによりも無数の桜花が揺れるそんな中、観桜会は始まった。所はもちろん高田城跡公園。忠霊塔前の芝生広場である。市担当者のお骨折りで、その中でも一番の場所を確保。大きな車座を作って宴を楽しんだ。市からは、村山副市長がご臨席、会員と大いに語らってくださった。

この忠霊塔付近には、いわゆる「通り抜け」できる桜並木がありそれは見事なものである。特に夜桜が素晴らしい。またその道の先にあるしだれ桜の大木は、格好の撮影ポイントとなっており、今年は人の渋滞があった。明治神宮の初詣並みである。

ちなみに、市の発表では今年は史上最高の人出、一二六万人であった由。間違いなく日本でも有数の桜の名所だろう。上越で唯一成功している観光財産かもしれないこの「桜」を、上越出身者はおおいに喧伝していただきたい。

昨年は雨の観桜会、「花はいわせき」さんのお堀に面した大広間で催された。ぎっしりと折詰のように密集して宴席盛り上がり、あれはあれで楽しいものであったが、やはり観桜は外がふさわしい。満開の桜の木の下には、「笑顔」が集う。

さて、桜を堪能したのち、私たちが向かった先は、安塚区朴の木の「田舎家」である。朴の木は安塚区でももっとも奥深い所に位置する集落であり、ご多分に漏れず過疎化が進む。ひっそりとし、どこか隠れ里の風情がある。幾重にも折り重なる青山のはるか向こうに米山を望む、風光明媚な山里である。

思いのほか標高が高いのか、桜花はおろか、木々の葉の芽吹きも今始まったばかり。春爛漫の高田からほぼひと月季節を遡った感じだ。

田舎家は、市が所有し民間に委託している宿泊集会施設で、実はかつてこの地区の小学校だった建物を改築したものである。沼木小学校、かつては、少ないなりに子供たちの元気な声に溢れていたのだろう。校庭も、小さなプールも、また国旗や校旗を掲揚するポールも三本残っている。学校を偲ぶ石碑も立っていた。

建物も外観はほぼ往時のまま。明日からでも学校を再開できそうである。ただし教室を改造した部屋は、しっかり宿泊向きになっている。

夜の酒宴は、里山の山菜を中心とした料理がずらりと並び、定石通り大盛り上がり。頭を冷やしに真っ暗な外に出たら、思いがけない冷気にくしゃみがひとつ出た。見上げれば、初春、満天の星である。

翌十日。早朝、施設の方の取り計らいで、急遽餅つき大会となった。杵と臼で餅つきなんて何年ぶりだろう」みな大はしゃぎで餅をつく。朝食には、もちろんきなこ餅、大根の辛み餅、あんこ餅などがずらりと並んだ。「正月には歳の数だけ食べたもんだ」「おれは高校まで歳の数食べった」などと語り合う。誰の顔も、少年少女になったかのようだ。

そして平場に降りてきて、雪ダルマ温泉、キューピットバレイ、かやぶき美術館、道の駅などを訪れ、公式の行程はこ

滝沢一成さん

れでおしまい。しかし、有志が残り自主参加の小旅行があった。それも少々ご紹介しよう。

行先はまず、糸魚川市のフォッサマグナミュージアム。ここは平成六年糸魚川市の美山公園奴奈川の郷にできた石の博物館である。糸魚川は言わずと知れたヒスイの世界的産地。そのヒスイや色々な鉱物、化石、岩石が展示されている。どなたの発案で行くことになったのかは知らず、私はあまり期待しないで訪れたというのが素直なところであった。ところが、その展示鉱石群の美しさ、圧倒的ボリューム！正直、驚いた。このミュージアムは一見の価値がある。お勧めします。

聞けば、糸魚川はいま「世界ジオパーク」の本邦最初の認定地となるべく運動している真最中だそうで、力の入り方が違う。上越もこういう目標を設定できないかしらと、ちらと考えた。

夜は、糸魚川の柵口温泉権現荘に宿泊。秘湯というほどではないが、いわゆる「かけ流し」の温泉で、ひっそりゆったり過ごすには悪くない温泉宿である。

さらに翌十一日。名立の割烹「阿かの屋」でささやかな昼の宴会、新鮮な魚介類を堪能した。そしてその後、来年の再会を期して、解散した。

桜あり、山里の山の幸あり、温泉あり、海の幸あり。自主参加の分も含めて二泊三日、思えば上越を満喫できた交流会であった。

かつて私たちはこのまち上越に生まれ、住んでいた。遠い昔に旅立ち、いまは都会に暮らす。故郷喪失者、ふとそんな言葉が頭をよぎる。「ああ、おまえはなにをして来たのだと吹き来る風が私にいう」、中也の詩の一節も浮かんでくる。この土地の人間であって、そうでない。私たちは、もはや旅人だ。

しかし旅人の究極の目的地はふるさとである。いつか心が帰巣するふるさとである。それまではただ和やかな気持ちで、懐かしさで、このまちを訪れよう。ふるさとは優しい、ふるさとは温かい。来年も、再来年も、そしてその先も、きっと変わらない。

どうか会員の皆様、今度はぜひあなたも故郷上越への心の旅にご一緒しましょう。

満開の高田公園で記念写真

快晴に恵まれ車窓の妙高山も絶景

青田川堤の桜も満開でした

宴会風景

カラオケを楽しむ旅人

「ドッコイショ」と杵を下ろす

餅つき大会

田舎家で

直峰城跡入口よりの眺望

キュービットバレイスキー場

かやぶき美術館見学